

紙芝居「演じることと語ること」 — 紙芝居のもつ特徴と効果を探る —

清 水 美智子

I はじめに

幼い子どもはなぜ紙芝居を喜ぶのか

お話し会の冒頭に毎回紙芝居を取り入れている。なぜか無意識のうちにお話し会の始まりは紙芝居という思いがあった。お話し会を続けているうちに、まだ物語絵本の読み聞かせに集中できない幼い子が紙芝居には集中できているのに気づいた。

お話し会は幼児 (2～3 歳児) 向けと大きい子 (幼稚園児～小学生) 向けの 2 種類を行っている。

* 幼児向け (時間 30 分) では

- ① 紙芝居
- ② 絵本の読み聞かせ
- ③ ブックトーク

* 大きい子向け (時間 1 時間) では

- ① 紙芝居
- ② 絵本の読み聞かせ
- ③ ストーリーテリング
- ④ ブックトーク

の順に行っている。

扱う絵本や紙芝居は、それぞれの対象年齢に合わせて内容を吟味し、作品選びをしている。

対象年齢が 2～3 歳のお話し会でも、その年齢の子どもを対象とした作品が選んである。それにもかかわらず紙芝居に興味を示す子が多い。そのような発見の積み重ねが、幼い子どもをお話の世界に導く手立てとして紙芝居が効果的だという固定観念を作り上げているのかもしれない。

そこで、紙芝居の持っている特有な構成要素を詳細に考察してみることにした。その中から幼い子どもたちが紙芝居を喜ぶ要因が見えてくるように思える。

物語の伝達手段について

その前に、子どもの身近にある物語の伝達手段としての文化財について少し確認しておく。

物語の伝達手段として容易に思い浮かぶものには、アニメ・マンガ・絵本・ストーリーテリング (語り)・紙芝居などがある。

ゲームもその中に入るかもしれないが、ゲームについてはまたいつか子どもたちと話し合ってみたい。

アニメ・マンガ・絵本・ストーリーテリング・紙芝居は、それぞれにアニメ表現か・マンガ表現か・絵本表現か・語り表現か・紙芝居表現かの違いはあっても、子どもの視点から見た物語の伝達手段としては同じフィールドにある。

6、7 歳前後の子どもたちに「アニメとマンガと絵本とストーリーテリングと紙芝居とではどれが好き？」と聞いてみると、どの子からも「アニメ」「マンガ」と返事が返ってくる。アニメ大好き、マンガ大好きの子どもたちに「絵本やストーリーテリングや紙芝居よりも、どうしてアニメやマンガの方がいいの」と尋ねると、異口同音に「面白いから」「解りやすいから」と答える。

「面白さ」「解りやすさ」は、子どもたちの好奇心を育む最も大切な要因であろう。子どもたちの心をひきつけている、物語表現による「面白さ」「解りやすさ」の果たしている役割を確認してみたい。

物語の「面白さ・解りやすさ」について

子どもにとっての「面白さ」「解りやすさ」をアニメとマンガから、その特性を比較してみる。その後、アニメ・マンガと比べて絵本やストーリーテリングが敬遠される要素がどこにあるのかも確かめてみたい。

さらにその後で、経験による知識量の少ない幼い子どもにとって、紙芝居の「演じること」と「語ること」の差異を比較検討してみることとする。

1. アニメ

- * 登場人物の容姿や行動の描写が動画によって表現され、会話が音声によって个性的に語られている。容姿の描写や声が強調してあるので、インパクトの強さが「面白さ」につながっているようにも思える。
- * 口の動きによって誰が話しているかが「よくわかる」。
- * 登場人物のすべてが同時進行で演じられて（表現されて）いるので、状況が把握しやすい。よって静止画よりも「解りやすい」。
しかし、子ども自身の考えや感情の移入はしにくく、受身型の文化財と言える。
- * 経験や知識量の少ない子どもに、長い歴史の中で培われてきた英知を伝える伝達手段として、アニメの持っている「解りやすさ」「面白さ」は、他に変えがたい力がある。

2. マンガ

- * 形式としては絵本と同じで静止画であるが、登場人物の容姿がオーバーにアクション・ペインティングしてあるものが多く、登場人物の個性が「解りやすい」。
- * 会話が噴出し形式で書かれているため誰のことばかが「よくわかる」。さらに、感情がストレートに会話文に表現されていて、痛快さの共感といった面からの「満足感」「面白さ」もある。
- * 子どもたちは登場人物の動作の展開を予測しながらイメージ化でき、噴出しのことばに感情移入をしながら読むので、受身型と読者参加型の中庸に位置する文化財と言えるのではなかろうか。

3. 絵本

- * 静止画である。絵は内容によって異なるが、あまりおおげさなアクション・ペインティングはされていないため、登場人物の個性はわかりにくい。
- * ドラマの状況説明と登場人物の会話が話の進行に合わせて文章で綴られており、誰の会話かが「解りにくい」。
- * 朗読者は会話文に適切な感情移入ができるよ

うに事前に作品分析をする必要がある。聞き手は絵に描かれた登場人物の表情やしぐさを見ながら、朗読者の声の表現に導かれ登場人物の心の動きを読み取っていく。

高度な読み取り能力が必要とされる参加型の文化財といえよう。

- * 絵本の持つわかりにくさは、経験を重ね語彙力をつけた子どもにとっては、自分のイメージで物語世界をふくらませて楽しむことができる。

与えられるイメージに誘導されにくく、物語の持っている思想を自分の考えや価値観に取り入れやすい文化財である。

- * 以上のような意味から、絵本は物語の内容を把握するために、アニメやマンガより推し量る努力が必要となる。そこが「解りにくい」ので「面白くない」のかもしれない。

しかし、この「解りにくさ」の持つ要素こそが、子どもの思考力を伸ばす大きな力になっていると思えるのである。

4. ストーリーテリング（語り）

- * ストーリーテリングは、視覚からの媒介がなくことばだけで物語を伝える手法である。生活体験から習得したことば（意味を把握した語彙）量の少ない子どもにとって、物語のイメージ化が困難であることは容易に想像できる。
- * その意味からもストーリーテリングは、「解りにくく」「面白くない」伝達手段となる。
- * しかし、日常生活の中で使われている平易なことばが選ばれている物語を語るように心がければ、3～4歳ころから楽しめるようになる。複雑なことば遣いが理解できるようになるにつれ、ストーリーテリングは集中力して聞く力を育む高度な伝達手段となる。また、語彙量の増えた子どもは、物語の意図する思考を自分の世界に対応させ、考えを膨らませて楽しむことができる。ことばの力をつけた子にとってはストーリーテリングは「面白い」物語の文化財となる。

- 乳幼児期のアニメ・マンガ・絵本・ストーリーテリング・紙芝居の扱いにおいては、それらを

媒介として楽しみながら事物を認識する位置にあり、物語の伝達手段としての「解りやすさ」

「面白さ」の段階としては同じフィールドでは語れないと考える。

以上のようなアニメ・マンガ・絵本・ストーリーテリングの視点から紙芝居を分析してみる。

Ⅱ 紙芝居

「演じる」ことと「語る」こと

「演じる」は、役を務める。「語る」は、節をつけて読み上げる（日本語大辞典）とあった。その解説を基本として考察するならば、以下のように考えられるのではなかろうか。

演じることと舞台の効果

紙芝居は多くの場合は舞台を使用する。舞台（枠）があることによって周りの風景が遮断され、手の届くほどの距離で演じられる紙のお芝居は子どもたちを物語の世界に集中させる効果を生んでいる。

また、紙芝居の引き抜く動きは静止画として描かれている登場人物に動きを与える。その動きは子どもの目には、命を持った生き物として映るのではなかろうか。そして、舞台の中の小さな世界が、今本当に目の前で起こっているかのような錯覚を起こさせる効果があるように思われる。それをより効果的に後押しするのが、読み手の声の技量である。

声の技量は紙芝居のタイプによって「演じる」手法、「語る」手法、そして「問いかけ」の手法に分けられる。

紙芝居のタイプと朗読表現の特性

1. 「演じる」タイプ

紙芝居の文体には、主に会話文によって表現されている作品が多い。会話文の多さは言うまでもなく、登場人物の気持ちが表現しやすく、役を演じる割合が多くなる。

文字が紙芝居の裏面に書かれているので演じ者は舞台の後ろに隠れて役になりきって演じることができる。演じ者が顔を見せないことによって、より登場人物が話しているという臨場感を演出することができる。観客の子どもたちにとっては、

まさに登場人物がおしゃべりしているように見え、聞こえてくるのではなかろうか。

その点から「演じる」タイプの紙芝居は、「解りやすさ」「面白さ」を多く持った、子どもたちに喜ばれる伝達手段となる。

2. 「語る」タイプ

対象年齢のグレードが上がるほど深い内容を持った作品が多くなる。

6歳前後の年齢期の子どもを対象とする作品には、紙芝居の裏面の文章が「地の文」が多く「会話文」の少ない文体によって綴られている作品が多くなる。それらの作品は「地の文」に物語のテーマが語られているために、「地の文」を聞きながら聞き手はドラマに籠められた文学的意図を推し量っていく。そのような点からも、聞き手の子どもが状況を把握できるように「地の文」に重きを置いた語り方が大切となる。

このような作品においては、読み手は舞台の横に立ち、絵本と同じように「語る」手法によって扱うことが好ましいと考える。

3. 「問いかけ」タイプ

幼い子どもを対象とした紙芝居に「問いかけ型」の作品がある。紙芝居が提起する問題を子どもたちに「問いかけ」、子どもたちの反応に応じるといったコミュニケーション形式になっている。

そのときにも舞台は、提供される教材と話し手（このときには演じ者でも語り手でもなく）との間に、見えているのだけれども話し手を途中でさえぎる役目となり、話し手の表情による誘導からほどよく切り離す効果となっているように思える。

しかし、このとき舞台の色が濃すぎると遮断効果が強くなり、問いかけの効果の妨げにもなる。

コミュニケーション形式の紙芝居は舞台を使用しないで扱うこともある。そのときは登場人物が話している文体では舞台の裏から問いかけるとよい。あるいは、登場人物が問いかけている文体を、扱う人の問いかける文体に修正しておくのも一つの方法であろう。この場合は舞台の横に立ち、参加者の子どもたちに直接問いかけるとよい。

紙芝居「演じることと語ること」

さらに、舞台を使用しないときには、扱う人はあまり目立たない衣服を着用するように心がけたいものである。扱う人が目立ちすぎるのは、参加者と紙芝居と扱う人の程よいバランスを壊す危険が生じる。

舞台の色や扉の形について

一般的に売り出されている舞台の色は、ほぼこげ茶色に統一されている。舞台の色については、ほとんどの作品において問題はないが、作品の色使いによっては枠の色が合わないことがある。

扉においては、あまり不都合はないが、できれ

ば袖（左右に開く扉）がもうすこし高い位置まであるとよい。なぜならば、読み終わった場面を引き抜いていくときに、前の場面の絵が残像として視野に残らないような袖の高さがほしい。

扉の高さと残像のかかりについては、名古屋

市立鶴舞中央図書館（元）館長 勅使逸雄氏（故）が常々説いておられたことである。



紙芝居のタイプ 演じ方と語り方と問いかけ方の比較

題 名	てんぐとかっぱとかみなりどん 	ハボンスのシャボン玉 	だれか おしえて 
文 脚 本 画 出 版 社	かこさとし紙芝居傑作選 二俣英五郎 童心社	豊島与志雄（原案） 稲庭桂子 桜井 誠 童心社	黒田かおる 黒田かおる 童心社
場 所	日本の山国	トルコの町	特定なし
タ イ プ	演じ型の物語	語り型の物語	問いかけ型の教育教材
あらすじ	山のふもとに1本の杉の木と沼がある。山の上の雲には暴れん坊の雷が、杉の木にはえぱりん坊の天狗が、沼には食いしん坊の河童が住んでいた。炭焼きのとうべいさんが①《えっちら お日さま おっちらさ えっちら にこにこ おっちらさ》と、ぬまの そばまで やつてくると、河童が「おまえのいえの子は、はなをたらしめているだろう。そういう子のおしりを、しおをつけてたべるのがだいすきじゃ。あすのひるまでに、子どものおしりをもってこい。もってこないと、ひどいめにあわせるぞ」と脅す。「そういえば、うちの子は、よくはなをたらしていた」②《えっちら こまった おっちらさ えっちら よわった	昔ハボンスという手品師が息子を連れて手品や曲芸を見せ暮らしていた。あるとき長雨が続き息子は病気になり死んでしまった。手品師は、魔法使いに息子を生き返らせてもらおうと、山奥深く訪ねて行った。魔法使いは「死んだ者を生き返らせるのは無理だが、むくろじの実の汁でシャボン玉を吹けば息子に会えるようにしてやる。実がなくなったときにはお前の身体は泡になって消える」と言い、銀の鉢とむくろじの実を渡した。ハボンスは人々が望むものを出して見せた。①そのうち、むくろじの実が、なくなってくる。ハボンスは、大きなシャボン玉をプーッとふきあげて「わしの子になあれ。わしの子になあれ。」と吹くと	こんにちは、はく《この子》まだ名前がないんだ。だれかつけて。(子どもたちから名前を言ってもらおう。)わかった○○だね。 はく《この子》今から外に行くよ。はだかんぼだけど、いいかな？(子どもたちに問いかける。子どもたちが「だめ～」と口々に叫ぶ。)えっ、だめ？どうして？(子どもたちが「服を着る～」と言う。)わかった。ふくをきたよ。これでいい？。(子どもたちが「いい・いい」と、嬉しそうに参加してくる。)いってきま～す。 (1場面目から最後の場面までこのような問いかけで進行する)濡れちゃうなぜだろう。雨がふってきたので傘を差す。

	おっちらさ」と歩いていくと、天狗が「ほったたを味噌漬けに」、雷が「臍を佃煮に」して食べるから、持って来いと脅す。次の日、息子は河童に「明日、黒い風呂敷に包んで山の上に置く」、天狗には「大きな声で合図をする」雷には「沼の所に置いておく」と伝える。翌日、河童と雷と天狗が山の上の黒雲と水の上に出た河童の頭とゴロゴロと鳴る音を合図と思い、いっぺんに飛び出し激突し逃げて行った。幼い息子は、無事の難を逃れた。	②ハボンスの子が、うれしそうなかおでそらへのほってゆく。子どもは、「おとうさん」といっているようでした。「おとうさん、てじな、おもしろい」と、よろこんでいるようでした。ハボンスは王に招かれ城に留まるように言われたが断り、次の日、最後の一つになったむくろじの実の汁を鉢に入れ、大勢の人の前で「息子になあれ」と唱えた。そして、息子の姿のシャボン玉の後を追うようにハボンスのシャボン玉が空高く上って行った。	八百屋の前で卵を見つけ、持って行くとする。お金が必要。 <u>お金は誰にもらえばいいの？</u> ママからもらって卵を買う。 <u>いただきます〜す。だめだめ料理をしないくっちゃ。</u> <u>さあなにができるかな？</u> <u>これなあに？</u> めだまやき。 (見ている子どもたちに向けて) <u>いっぱい手伝ってれてありがとう。</u>
文 体	会話文が多い。地の文も会話調に書かれており、感情移入がしやすい。地の文が「とうべい」ではなく「とうべいさん」となっていることなどから、幼い子にも親しみやすい配慮となっている。 網掛け部分のように会話文は平仮名の分かち書きになっている。擬音はカタカナ。 使用されている漢字、「山」「大きな」「木」「上」「目」「子」「小さい」「中」「水」にはルビが打ってある。	会話分が少ない。地の文も説明調に書かれており、感情移入がしにくい。 擬音・国名・人名はカタカナ 使用されている漢字「子」「山」「火」「玉」「花」「目」にはルビが打ってある。会話文は、平仮名の分かち書きになっている。 ①場面や②場面の「」内のことは会話として読むべきか、説明として読むべきか、表現が難しい。	全文会話文と登場人物から参加者への問かけ文で構成されている。そのために、舞台を使わずに話しかけるときには登場人物主体の会話を、扱っている話し手の会話に書き換えると違和感がなくなる。 「カサ」と「ママ」以外はすべて平仮名の分かち書きになっている。聞き手からのどんな発言にも応じなければならない。回答以外の発言の対処も求められる作品である。
聞き手の対称	4歳前後から楽しめる。	6歳以下では難しい内容だが、5歳前後の子で聞ける。	2・3歳向き
読み手の対称	5歳頃から読むことができる。	7歳前後から読むことができる。	8歳前後の子から扱うことができる。
作 風	弱者が知恵によって乱暴者をうち負かす痛快なユーモア作品。難題解決型。	文学的に深い味わいを持つ感動作品。	幼児に生活マナーを示す、教育紙芝居。
状況設定	夏の風物でもある雷や河童を登場させ、庶民生活の風習を反映させている。	わが子への親の情愛の深さ。子を失うことの悲哀の深さを表している。	社会通念としての常識を幼児に確認させる。
人物設定	のんびりやの炭焼きと、賢い息子。食いしん坊の河童・えばりん坊の天狗・暴れん坊の雷。	息子が生きがいの手品師。お父さん大好きな息子。	何のわきまもない男の子。
テクニク	舞台と紙芝居の間のわずかな隙間を利用して、①場面では、上下に動かすと炭焼きが家路を急ぐ様子を動きとして表現できる。②の同じフレーズでは、引いたり戻したり的技巧を加えると、炭焼きが悩みながら歩く様子を効果的に出すことができる。	あまり技巧に走らず、静かに淡々と語りあげること、悲しみの深さが伝わる作品。	子どもたちが考えて答える間のタイミングを計る。子どもたちが集中してくると発言が多くなる。どの子も発言できるように配慮する。網掛けの部分は話し手の声で問いかける。傍線の部分は登場人物声で問いかけた方が親しみやすくなる。
演 出	河童と天狗と雷の持っている愚直さが、息子の付け入る隙である。その愚直さの表現がこの作品を演じる妙味となる。	文学的に深い内容を持った物語で、あまりオーバーな感情移入をしない方がより悲しみが伝わる。聞き手自身の悲しみとして味わえるように伝	子どもたちの発言によっては、紙芝居に取り上げられていない項目の挿入をして楽しむこともできる。 紙芝居を媒介とした子どもたちとの

紙芝居「演じることと語ること」

		えたい。	トークが可能である。さまざまな試みを考えてみるとよい。
舞 台 (枠)	既製の枠の色で合う。	既製の枠の色で合う。	作品が白っぽいため、舞台の色が強すぎて枠ばかりが目立ってしまう。
課 題 と 効 果	この種の作品においては、さまざまな切り口（テーマ）作品作りが考えられる。面白さ楽しさの質も意識するとよいのではないだろうか。	絵や文体などを今風にした感動作品も、子どもたちに与えたい。伝記なども同様に考えられるのではないだろうか。	このような作品をヒントとして、教育教材の試みが考えられる。

以上の点から紙芝居には、マンガの要素も絵本の要素も併せ持っていることがわかる。

お話し会での紙芝居の特徴

- 2～3歳児のお話し会において、紙芝居の始まりと終了時に扉の開け閉めをわれさきにと奪い合っている。始まりにおいては扉を開ける作業を、一人ひとりの子が終わるまで繰り返し、参加者全員の子の扉を開ける作業が終了して紙芝居が始まる。終了時も同じように、全員の子の扉を閉める繰り返しを終了し、紙芝居の幕が下りるのである。子どもにとって扉の開け閉めは、遊びであると共に儀式であるように見受けられる。
- 2歳前後の子どもたちは紙芝居の終わった後、紙芝居の箱（舞台）で遊んでいる。子どもにとって舞台の扉は、物語の世界を運んでくる、魅惑的な異界への入り口なのだろう。
- お話し会の終了後、紙芝居を読みあっとして遊んでいる。読み手遊びをしているうちに字を読むことの楽しさを発見していく。
- 幼児向けのお話し会終了後、3歳児が読み手になって、子どもの演じる紙芝居会が自然発生的に成立した時期があった。家で練習してきてそらんじて読む子。たどたどしく字を拾い読みする子など。恥ずかしがりやさんが、明日こそはと頑張っている様子などが愛おしかった。しかし、このような企画は大人がこいに企画しようとしても無理が生じ、かえって紙芝居が嫌いになってしまう可能性がある。子どもが楽しんでいるそれぞれの個性を理解し認めることで、成長を見せる。
- 幼い子は無意識のうちに紙芝居の前に立ってしまう。すると、他の子から「見えないから

座って」と注意され、自然にマナーを覚えていく。そのような集団の効果もある。

- 幼い子でも難しい内容の物語を、紙芝居では聞くことができる。しかし、大きい子の中には、紙芝居は小さい子のものと思い敬遠する傾向がみられる。

家庭での紙芝居の特徴

- * 母親が7歳と4歳の息子に「じしんのあった日よう日」を読んでいる。リラックスしているが、物語は真剣に聞いている様子が伺われる。紙芝居が災害時の教育として、うまく活用されている。



- * 7歳の兄が4歳の弟に「きんいろのさかな」の物語を読んでいる。4歳の子には少し難解な内容のドラマではあるが、物語に集中している。



- * 4歳の弟は母親に抱かれて、再度「じしんのあった日よう日」を読んだ。兄も内容を確認しているのか静かに聴いている。その後、兄が「お母さん。地震があったらどこで待っていたらいいの?」と聞いていた。不安になったのだ



ろうか。現実での生きた教材となっていた。

- * 次の日の朝、4歳の弟は母親を相手に「まんまるダンゴムシ」を一生懸命に読んでいた。たどたどしい読み方ではあったけれど、「ほら、よく上手に読めるでしょ」と、その雰囲気誇らしく語っていた。読むことへの挑戦が無理なく発揮されている。



- 家庭で扱われる紙芝居は演じ者も観客も家族というホットな小劇場が成立する。母親はわが子に伝えたい内容の作品を自由に選ぶことができる。母親の意図が家庭教育にあったとしても、物語であるからこそ僕も安全教育も其の外もろもろの教育にも、子どもたちは何の抵抗もなく受け入れている。それは、子どもにとって直接に自分に向けられている指摘ではないから飲み込みやすいのだろう。ここに紙芝居を媒介とした、良識ある子育ての家庭教育の一つの入り口があるように思われる。

紙芝居の種類と内容

- 問いかね紙芝居
「だれかおしえて」童心社
黒田かおる・脚本／画
- 仕掛け紙芝居
「いたずらおばけ」教育画劇
久地 良・作 尾崎真吾・画
- 生活習慣紙芝居
「くろわんしろわん はみがきシュッシュ」
教育画劇
伊東美貴・作／画
- 自然科学紙芝居
「まんまるダンゴムシ」教育画劇
今森光彦・写真／作
- 行事紙芝居
「うさぎの みみちゃん たなばたまつり」
教育画劇
間所ひさこ・作 新野めぐみ・画
- 安全教育紙芝居
「しょくどうは 8かい」童心社
上地ちづ子・脚本 倉石琢也・画

「おねえちゃん なかないで」童心社
警視庁交通部・指導 都丸つや子・脚本
ふりやかよこ・画

- 災害教育紙芝居
「じしんのあった 日よう日」教育画劇
小暮正男・作 西村達馬・画
指導監修・東京消防庁防災部他
監修・元自治事務次官他
協力指導・日本学校安全会
企画立案・石川光男
- 「いなむらの火」童心社
川崎大治・脚本 福田庄助・画
- 昔話紙芝居
「てんぐとかっぱとかみなりどん」童心社
かこさとし・作 二俣英五郎・画
(古い時代の文化)
- 「まほうのふで」童心社
川崎大治・脚本 二俣英五郎・画
(知恵や勇気の大切さ)
- 「イワンのばか」童心社
横笛太郎・脚本 土方重巳・画
(愚直の力)
- 「きんのさかなのものがたり」童心社
プーシキン・原作 堀尾青史・脚本
久米宏一・画
(人間の欲の愚かしさ・親切の限界など)
- 創作物語紙芝居
「なかよしになった日」童心社
香山美子・脚本 山本まつこ・画
(コミュニケーション)
- 「おとうさん」童心社
与田準一・脚本 田畑精一・画
(親の情愛)
- 「春風と王さま」教育画劇
小川未明・作 清水たみ子・脚本
輪島みなみ・画 西本鶏介解説
(受け入れるゆとり・趣きを味わう感性)

など、さまざまな分野の紙芝居を使って、物語の楽しさや、人としての心得なども伝えることができる。これはほんの一例であって、このほかにもたくさんの紙芝居がある。今一度、紙芝居の種類やグレードを調査し分類し直してみることで、

紙芝居の利用方法や新たな作品像が見えてくるのではなかろうか。

Ⅲ 紙芝居の可能性と今後

聞き取る力の可能性と限界

- 子どもたちは日常生活の体験を通して意味を把握したことばを習得していく。よって、聞く力は体験を重ねることによってグレードアップしていく。その意味からも、ことばの育ちの段階にフィットした伝達手段として、紙芝居は絵本と共に語意力の少ない、幼い子どもにとってピッタリの伝達手段といえよう。
- 紙芝居の分析の結果、幼い子どもたちがなぜ紙芝居が大好きなのか、「解りやすさ」「面白さ」の質を確認した。その点から、紙芝居は絵本やストーリーテリングよりも、幼い子に無理なく家庭教育教材として取り入れることができると考えられる。
- ややもするとメディアの捕り子になってしまいがちな子どもたちを、2～3歳の幼い時期から紙芝居を使って絵本やストーリーテリングのフィールドに誘い込むことも可能である。

尚、良識ある人に育てるための家庭教育の出発点が、絵本やストーリーテリングを使うよりも少し早く始められることになるのではなかろうか。

- 「2～3歳児に絵本を読んであげようとしても、聞かずにどこかに行ってしまう」「聞いてくれない」と、訴えるお母さんがいる。2歳前後の時期に絵本に馴染む経験を持たない子ども。あるいは、そのころからビデオやアニメに馴染んでいる子どもたちは、絵本に集中する力が育っていないように思われる。しかし、「演じることと舞台の効果」で述べたように、紙芝居は子どもをひきつける効果がある。

そのような意味から、この時期に求められる紙芝居の内容を調べてみることで、2～3歳向けの紙芝居の可能性が具体的に見えてくるのではなかろうか。

紙芝居の歴史

文芸用語の基礎知識 昭和54年3月 増補改訂版 加太こうじによる【解説】「紙芝居」には以下

のように記されている。(以下全文を引用)

「主として子どもを対象とした絵物語による口演。江戸時代末期に、映像が動いて見える幻灯があった江戸では写し絵、大阪では錦影絵といった。それから転じて明治中期ころ、紙人形の芝居ができた。演者は一人だった。はじめは、これも写し絵と称して寄席で見せたが、客は紙人形の芝居だから紙芝居とよんだ。

のちに、縁日祭礼等で見料をとって小テント小屋で見せるようになった。昭和になると街路・空地などで見料の代わりに飴を売って見せるようになり紙芝居屋がふえた。昭和5年からは絵物語の形式に変わった。折からの不況で失業者が続々と紙芝居屋になった。人気作品「黄金バット」と紙芝居屋の増加で紙芝居は新しい街の子どもの娯楽として定着した。教育方面にも使われて印刷による紙芝居もできた。太平洋戦争中は街の紙芝居はさびれたが戦後すぐに復活して、テレビ受像機が普及したころから衰退した。現在では娯楽をかねた幼児教育用として出版されている。」(加太)

家庭教育教材としての可能性と今後

加太こうじ氏の指摘する「娯楽をかねた幼児教育用」について、現代の子どもたちの教育教材として、大きな可能性を秘めた分野といえるのではなかろうか。

子どもたちがこれから生きていく長い人生の出発点において、物語絵本から学ぶ価値観や人のかかわり方など、また、あらゆる分野の知識絵本から得る明確な知識は、物事を思考していくうえでの大きな土台となっている。それらの役割を担ってきた絵本が、今、家庭で読み聞かせをする環境が十分に整っているとはいえない。市や町の図書館には貸し出し用に多くの良書が配架してある。その中には出版社や作家の方々の努力で目を見張るような秀作が数多く並んでいる。それにもかかわらず自分で読める年齢期の、日本の子どもたちの読書量のデーターは低下の一途を辿っている。

そこで、乳幼児期における、「育ちの土台を育む」教材としての紙芝居を今一度精査し、乳幼児期の自働力の育みとしての環境と教材を、英知を絞って考えていきたいと思う。

紙芝居は幼い子どもにとって楽しめる伝達手段であり同時に知る喜びや知的好奇心を育む。さらに子どもたちの豊かな人間性を培う文化財として、奥の深い能力の育みに利用できると考えられる。

幼い子どもの心に届ける教育教材として、年齢にあった作品作りが考慮されることが必要ではないだろうか。

例えば

自転車に乗り始めたばかりの子に伝えたい交通ルールとしての紙芝居

【分類】 安全教育

【テーマ】 交通法「ひき逃げの罪」

【提起】 自転車で歩道を通行するときの問題点。

【グレード】 5～7 歳向け

【ドラマ】 歩道を歩いている小さい子にぶつかってしまったとき、事故を起こした子どもがとらなければいけない対処のあり方。

など、紙芝居専用のレビュースリップを考案し、段階教育としての紙芝居の分類。分野とグレードの精査をするといふ。

尚、家庭で扱われる教育教材としての紙芝居において、最初にクリアしなければならない課題に紙芝居の舞台がある。紙芝居の舞台は先に検討した結果のように、大きな効果を生む役割を持っている。しかし、家庭において舞台を用意するには予算の面からも、持ち運びの面からも問題がある。

また、「面白くて」「解りやすい」教材の内容として、文体においても、画面の描写においても(独特の動きをともなう紙芝居として)、さらに「演じやすく・語りやすい」紙芝居にしていく余地が残されていると思う。

2～3 歳の時期を対象とする紙芝居の分野では、家庭教育における「乳幼児期の自助力の育み」に焦点を絞って、作成を考えてもいいのではないだろうか。

それらの視点から、乳幼児向けの家庭教育教材として、作品の内容や表現にも検討が及ぶことが望まれる。そのとき、紙芝居の既成の概念を取り払い、新たな形式の紙芝居が生まれるのかもしれない。ともあれ、日本でのみ完成した紙芝居の、これからの課題として、その可能性の大きさに期待を寄せている。

Kamishibai, Picture Card Show “Perform and Tell”

— In Search of the Effects and Characteristics of Kamishibai —

Shimizu, Michiko*

子どもは赤ちゃんの時期から、母親や周りの大人に依る働きかけから、物事を把握していく力をつけているように思われる。その働きかけの一つに物語るということばかけの手段がある。親が無意識に話しかけている状況説明のことばかけを、意識的に形に表したものが絵本・紙芝居と考える。

絵本・紙芝居はその歴史の中で、娯楽としてあるいは教育教材として、時代の要請にこたえてその姿を変えてきた。今、子どもたちに物語る分野においてアニメ・マンガ・絵本・ストーリーテリング・紙芝居から、さまざまな提起がなされている。それらを子どもの良識を育む手段として、成長に合わせ適切に活用する研究が進められている。

乳児から小学校低学年までの教育教材としての、紙芝居の可能性について、今一度の考察を試みたい。

キーワード：家庭教育の教材としての紙芝居，乳幼児向けの教材としての紙芝居，楽しさと解りやすさの質を求めて，分野とグレードの分類，演じることと舞台の役割

*Nagoya Management Junior College